
JLTA Newsletter No. 24
日本語テスト学会
The Japan Language Testing Association

JLTA Newsletter No. 24 発行代表者: Randy Thrasher 2005年(平成17年)10月21日発行
発行所: 日本語テスト学会 (JLTA) 事務局
〒389-0813 長野県千曲市若宮 758 TEL 026-275-1964 FAX 026-275-1970
e-mail: youichi@avis.ne.jp URL: <http://www.avis.ne.jp/~youichi/JLTA.html>



Two Conferences, Three Organizations

Randy Thrasher (*Okinawa Christian University*)

The 27th Language Testing Research Colloquium (LTRC 2005) was held at the University of Ottawa from July 20th to 22nd. The first annual meeting of the Korea English Language Testing Association (KELTA) was held on August 6th at Seoul National University. I would like to tell you about the two meetings and the organizations behind them and conclude with some comments about their relationship with JLTA.

LTRC 2005

The theme of the conference was Challenges, Issues, Impacts: The Interplay of Research and Language Testing Practice. There were two pre-conference workshops both dealing with approaches to language testing research and development. Bruno Zumbo led the first on quantitative approaches and Anne Lazaraton and Linda Taylor led the second on qualitative approaches. Zumbo also delivered the Messick Memorial Lecture. I will discuss his presentation in some detail in connection with my presentation at the KELTA conference.

There were 26 papers, 12 posters, 13 works in progress, 3 issue papers (a new category this year with presentations by Gary Buck, Muhammad Usman Erdosy, and Liz Hamp-Lyons), a symposium with Bernard Spolsky, Andrew Cohen, Alan Davies, Tim McNamara, and Elana Shohamy, and 2 plenaries (one by Lyle Bachman and another by Charles Alderson). Lyle spoke on "What are we measuring? The dialectic of abilities and contexts in defining constructs in language assessment." Charles' paper dealt with diagnostic testing. It was heartening to see a number of Japanese presenting papers and posters.

Language testers in Japan are becoming more and more visible on the international stage.

At the ILTA/LTRC business meeting it was decided that LTRC 2007 would be in Barcelona, Spain. LTRC 2006 is scheduled for Melbourne in June.



(to be continued to p. 6)

第9回 全国研究大会 報告

9月3日(土)、大会運営委員長である法月健先生(静岡産業大学)を総合司会に、JLTA 会長の Randy Thrasher 先生(沖縄キリスト教学院大学、国際基督教大学名誉教授)と会場校の情報学部・学部長山田登先生からの開会のことばを皮切りに、静岡産業大学(藤枝キャンパス)において第9回全国研究大会が始まった。「学校教育とテスト」を大会テーマに、午前中は研究発表、午後はシンポジウムと講演という流れの中で、多くの方が質疑応答などにより活発な意見交換ができた。参加者80余名の熱気と共に、第10回大会への大きな期待をも感じながら本大会の幕を閉じた。

研究発表

Increasing the Relevance of the TOEIC Scores to the School Curriculum

Soo im Lee (Ryukoku University)
Kiyomi Yoshizawa (Kansai University)

TOEIC は、今日、日本のみならず韓国などアジア諸国においても急激に普及して、そのスコアが一人歩きしているが、その一方で、英語力測定法としての TOEIC の限界と本試験に関する研究の不足も報告されている。

発表者はまず TOEIC そのものを精査し、たとえば使用語彙は基礎的な 1000 語が 83% を占め、センター入試などと大きな差異は見られないとする。またビジネス英語が多用されているわけでもなく、文法も一般に考えられているほど高度ではないので、高校レベルで十分であり、問題文のリーダビリティは決して困難ではないことを実証している。その一方で速読を必要とする出題は含まれていない。

このような特徴を持つ TOEIC を教室で活用するには、的確な学習目標を設定し、そのためには無意味な数多くの語彙の暗記を避け、基礎語彙及び慣用表現の有効な活用、また速読教材を補充するなど、単に TOEIC の得点に押し流されず、真にコミュニカティブな英語力を修得すべきであることを提唱している。

報告者: 浪田克之介(北海道情報大学)

Clothes Make the Man (A Viewpoint of a Lifelong English Learner)

Michihiro Hirai (Kanagawa University)

日本の企業で重視されている TOEIC はビジネスマンに必要な英語力を測定していないことを、発表者は大手メーカーにおける豊富な経験に裏打ちされた調査研究をもとに実証する。

具体的には、日本人ビジネスマンにとってはリーディングやリスニングといった受動型能力よりライティング

やスピーキングといった発信型能力の強化が必要であるが、TOEIC で 700 点から 800 点を取得する中級の上位者がその後発信型能力の伸びは鈍化して「ホッケーのスティック型」のカーブを描くという。つまり受動的スキルの訓練で自動的に発信能力を高めることはできないのである。また TOEIC の出題内容も基礎的なビジネス英語しか使用されておらず、高度の英語ではない。

これらの欠陥を補うには、TOEIC を偏重せず、より広角的な英語力評価法を採用して、バランスのとれた訓練をすることが真の英語実践力を身に付けるためには重要であると主張している。

報告者: 浪田克之介(北海道情報大学)

リスニング評価手段としてのディクテーション多段階評価手法の検討

金森 理(網ベネッセコーポレーション)
長沼 君主(清泉女子大学)

リスニング能力を測定するテストとしてディクテーションが有効であることを示した上で、機械処理可能な多段階評価の可能性を示した意欲的な研究発表であった。ディクテーションの多段階評価のために、「編集距離」という概念が利用され、客観的な採点を実現させた。多段階評価により、1) より説明力の高い問題になること、2) 集められるテスト情報量が 2 値評価の場合は成績上位層のみからであるが、多段階評価の場合は、成績中位層からのテスト情報量が増えることなどが報告された。誤答タイプによりスコアにウエイトをおく試みなども提案され、今後の研究の進展が楽しみな発表であった。

報告者: 島谷 浩(熊本大学)

Development of a Pronunciation Ability/Difficulty Scale Using the Song of Do-Re-Mi

Tetsuhito Shizuka (Kansai University)

Professor Shizuka reported his attempt to make a pronunciation measurement instrument which can be used easily in the classroom. The data was collected as follows: In a CALL lab, 86 university students recorded their singing of Do-Re-Mi and structured but unscripted self-introduction. Before recording, students could confirm testing points underlined in the lyrics. Then, their pronunciations were Rasch-analyzed. The pronunciation ability/difficulty scale proposed by this study is very useful and having learners sing a song seems to be an interesting format for testing pronunciation.

Reported by Hiroshi Shimatani (Kumamoto University)

The Dimensionality of the Internal Structure of a Japanese University English Language Placement Test

Tomoko Fujita (Tokai University)

Professor Tomoko Fujita from Tokai University presented a paper on "The Dimensionality of the Internal Structure of a Japanese University English Language Placement Test." Using a correlation analysis and a Principal Component Analysis, she examined the dimensionality of the original and revised placement tests consisting of three subtests: Grammar, Listening and Reading. The results and implications from both analyses are as follows: 1) Different subtests measured different domain of language skills. 2) Different sections in the Listening subtests measured a different aspect of listening proficiency. 3) The ties between Grammar and Reading subtests were strongest; however, the test method (eg, multiple-choice or dictation) might have affected how the ties among subtests were connected.

Reported by Yuji Nakamura (Keio University)

リスニングテスト形式および項目タイプが項目特性に及ぼす影響

平井 明代 (筑波大学)

平井明代氏(筑波大学)はテストの4肢選択法(Multiple Choice: MC)の問題点に焦点を当てた研究成果を「リスニングテスト形式および項目タイプが項目特性に及ぼす影響」という題目で発表を行った。リスニングテスト項目を記述式にした(Open-ended: OE)問題による予備実験の結果を基に、項目困難度および弁別力の変化、及び項目タイプと項目困難度、弁別力との関係を詳細に分析した。導かれた結論のうち、主なるものは以下のとおりである。1) 全体的に、OE項目の方がMC項目よりも困難度が高かった。2) OE項目の方が弁別力が高い傾向にあった。3) OE項目とMC項目の併用により、妥当性、信頼性を損なうことなく、限られた項目数でできるだけ幅の広いレベルをカバーできるテスト作りも可能と思われる。

報告者: 中村優治 (慶応大学)

語彙テストから日本語学習者の語彙知識の特徴を探る～広さテストと深さテストの結果から～

鈴木 秀明 (神田外語大学)

堀場 裕紀江 (神田外語大学)

松本 順子 (神田外語大学)

小林 ひとみ (ヒューマンアカデミー)

「広さを測定する日本語語彙テスト」と「深さを測定する日本語語彙テスト」それぞれの特性・性能について、

また両者の関係について、L2日本語学習者を被験者にした場合と日本語母語話者を被験者にした場合の両方について調べた研究の報告がなされた。



れた。

具体的には、テスト項目に使用する「語彙」は同一のものを用いて、形式・性質の違う2種類の語彙テスト(広さテストと深さテスト)を作成し、L2日本語学習者86名、日本語母語話者46名に受験してもらった。

分析の結果、広さテストと深さテストのどちらの日本語語彙テストにおいても、対象語の難度(級)の違いによって、正答率に統計的に有意な差が見られた。また、L2日本語学習者の語彙テストにおいては、広さテストと深さテストには高い相関が見られた。といったことが、報告された。

報告者: 片桐一彦 (専修大学)

入試改革(スピーキングテストを高校入試に導入する場合)と利害関係者の価値観: 妥当性理論への示唆

秋山 朝康 (文教大学)

第一に、Mislevy(1996)、Mislevy(2003)等の最近の妥当性理論を Messick(1989)の枠組みと比較検討し、入試が何を評価するために何を、どのような証拠を集めているか、また入試が社会的にいかなる結果を与えているかに関して考察することの必要性が述べられた。

次に、高校入試にスピーキングテストを導入する際の可能性について論じられた。スピーキングテスト導入への賛否及び波及効果の有無について、中高の教員に対してアンケート調査を行ったところ、中学ではどちらも肯定的な回答が多かったが、高校では否定的な回答が多く、中高の意識の差が大きいことが分かった。また、文科省の職員、大学教員などへの面接調査では、「話す力の指導により重点が置かれる」というプラスの波及効果を期待する意見もあるが、反対に、「話す力以外の能力を指導する時間が減る」、「中高の指導において大きなギャップができるかもしれない」というマイナスの波及効果を懸念する意見もあった。

教育改革が進むためには「内容」、「方法」、「態度」の3つの段階があるが、教員にとっては、「指導内容」や「行動」を変えることよりも「態度」や「価値観」を変えることの方が難しい(Wall, 2000)。入試改革には利害関係者の教育的・文化的な価値観が阻害要因となりうる。入試の妥当性を論ずる場合、利害関係者の価値を考慮する必要がある。

報告者: 織田 敦 (掛川西高校)

高校教員作成「英語学力テスト」のIRT分析

齊田 智里 (茨城大学)

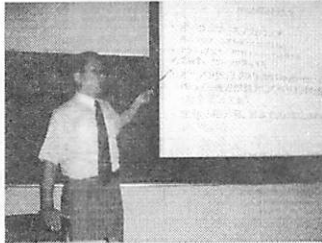
茨城県高等学校英語学力テストに異なるIRTモデル(2値)を適用し、分析結果を比較検討している。2PLと3PLで異なる項目パラメタ値の解釈について、項目内容と合わせて議論がなされた。能力推定値はほぼ同じであった。作題者の希望とは異なり、毎年困難度にかかなりの違いがあることも明らかにされた。発表者は、項目についてより多くの情報が得られ、低学力層の当

て推量も考慮した3PLの適用が、現状ではより適切ではないかと考察している。

報告者: 藤田 智子 (東海大学)

テストデータ分析プログラムTDAP と オープンソースの e ラーニングソフトウェア moodle で実現したアダプティブテストシステム

秋山 實 (合資会社eラーニングサービス)
今井 新悟 (山口大学 国際センター)



本発表は、山口大学の留学生対象の日本語テストに、テストデータ分析プログラム TDAP2.0 を教育管理システムであるオープンソース

ソフトウェアの moodle に移植し、アダプティブなテスト機能を組み込んだシステムを開発した事例報告である。世界では定評のあるソフトウェアであり日本における語学教育における moodle の知名度は最近、やっとなまりつつあるというのが現状だ。しかし、基本的なスペックは PHP+MySQL で動作し、ブラウザ上で、テスト作成とその結果分析ができる非常に便利なソフトである。今回の報告は 2004 年の JLTA 大会で報告された TDAP を moodle に組み込むことによって、テスト結果のデータを入力するのに時間がかかる問題を解決した事例が報告された。本報告では、「開発予算が少ない」や「大規模なアイテムバンクが構築できない」などの山口大学 J-CAT 開発の発端となった教育現場が直面する現状から、このプログラムの開発に発展し現場のニーズに応えた内容となった。小規模アイテムバンクで良いという利便性はあるが、システムの仕組みとして判定の誤差範囲を保証できないという欠点にもつながるという問題点も指摘された。しかし、テスト項目の組合せ如何で保証は可能である点も加えて報告された。moodle はあくまでもフレームであり、重要なのはコンテンツであることを理解すべき点である。プログラムの有効利用を実現するには現場の教員による理論と実践の両面に亘る教育実践の努力が必要である。本発表はその一例と言える。

報告者: 李洙任 (龍谷大学)

シンポジウム

「入学試験における言語テストのあり方」をテーマに、入学試験という High Stake なテストに何らかの形で関わっている 4 名が、それぞれの立場における話題を提供しながら、<さわやかな熱風>を会場に運んだ。

「テストで国の未来を拓け」

荘島宏二郎 (大学入試センター)

テストは、構成概念(学力や心理変数)の測定器具として人材選抜や教育評価の諸場面で重要な役割が与えられている。しかし、その精度は高くない。身長計が、身長を高い者から低い者にほぼ間違いなく並び替えることができることを思えば、テストが学力の高い者から低い者に並び替えていることの精度の低さは目を覆うばかりである。とはいえ、テストは、妥当性と信頼性を満たせばよいというものではない。

テストには、社会的機能がある。我が国を運営する人材は、一般にテストによる選抜を勝ち抜いてきた者たちである。テストの実務家は、自らの作成したテストによって選抜された者たちが、当該コミュニティにおいて重要なポストにつく可能性について無自覚であってはいけない。テストで選抜する人材が国の将来を担うのであれば、アドミッションポリシーで各個別大学が謳っているように、国際感覚や環境倫理、リーダーシップなどが高い人材こそ選抜すべきであり、基礎的な学力に偏重した選抜システムから移行すべきである。これからの一層、AO 入試などの拡充が求められる。テストの実施者は、国の未来を見据えつつ、どのような国家像のもとで、どのような人材が必要であるか、アカウントビリティが保障されたもとで、アドミッションポリシーを作成し、それに準拠する形でテストを実施することが求められている。

高校入試の波及効果: 誰に、どの程度?

杉本博昭 (伊東市立対島中学校)

高校入試の波及効果が、学ぶ側だけでなく教える側である教師にも発生する。しかも、塾の講師に対しても!である。そこで、杉本氏は、高校入試を終えた中学3年生 105 名を対象に定期テスト、県下一斉の実力テスト、入学試験に対する意識とその勉強法についてアンケート調査を実施し、その結果を英語力の上・中・下位群間に分けて分析された。また、本調査は生徒の多くが、実際は学校の授業時間よりも「塾」での学習時間が多いことを鑑みて、塾での学習内容や学習時間も調査し、波及効果がどのように表れているのかを、実際の生徒の成績との関連も含めて報告された。

センター試験リスニングテスト導入が高校生の英語学習に与える波及効果

織田 敦 (静岡県立掛川西高等学校)

2006 年度より、センター試験においてリスニングテストが実施されるが、この影響で高校3年生の英語学習をめぐる状況が変わってきている。また学校側でも新たな取り組みがなされ、リスニングテストを意識した学習が開始されていると推察される。そんな状況を、高校3年生 675 名を対象にアンケート調査を行い、生徒がリスニングテストをどのようにとらえ、また、どのように学習をしているかの実態を分析された結果を紹介された。英語を聞く時間の増加や聞く力の重要性への認識の高まりなどの変化が観察されたことの報告と、今後の指導方法についても言及された。

多様な入試と多様な英語力の中で

清水裕子 (立命館大学経済学部)

学生の英語力の低下や二極分化を実感している教員も多いことであろう。特に私立大学においては、入学者の選抜方法が多岐にわたり、入学試験を通じてひとつの尺度(入試問題)によって英語力の測定をすることが不可能あり、当該テストとその受験者に依存した結果をもとにして入学者が決定されていく。本発表では、選抜の多様性と統一的なテストの実施例を紹介し、入試という大きな決定を行う試験での良問作成の重要性に触れた。

報告者:清水裕子(立命館大学)

基調講演

英語学習者はテストをどう見ているか—データを見ながら考察する

渡部良典 (秋田大学)

講演は、渡部氏の英語学習経験に基づき、「学習者の視点がテスト研究に活かされているか」、「テストの解釈が学習者に伝わっているか」という疑問提起から始められた。その後、渡部氏の博士論文作成の裏話を加えつつ、テストが学習や指導へ与える影響である「波及効果」に関わる諸要素と波及効果研究の手順が説明された。さらに、テストの導入・テスト問題の公開だけでは良い波及効果は得られにくいことや、好ましい波及効果を得るために必要な事項が言及された。具体的には、(1) テスト問題を公開するだけでなく、採点基準を含めた「テスト細目」を作成し、公にしていくこと、(2) テストや評価をカリキュラムの中に位置づけ、授業との関連を明示すること、(3) テスト使用者・受験者・作成者の test literacy (テストの実践的知識・使用能力) を高めることなどが挙げられた。最後に、test literacy 向上のために渡部氏が大学生に行っている授業が紹介された。講演後には活発な質疑応答がなされ、テスト細目を公開することへの抵抗感や、公開してもその中身を伝えていく難しさはあるが、より良い方法を求め模索していくことの重要性などが話し合われた。

報告者 小泉利恵 (筑波大学大学院院生)

BEHIND THE SCENES

大会実行委員長

法月 健 (静岡産業大学)

9月2日(金)、いよいよ大会前日。朝から学生スタッフと設営に入る。午前中で全部終わる予定が夕方近く

まで続く。やるべきことはやったという感覚が学生たちは満足気。でも館内掲示は未完成。朝一番の仕事か。夕方、JLTA 理事の方々と夕食を共にする。幸福感で、もう夢見心地。深夜、… 眠れない。夜が長い。

9月3日(土)午前7時20分。開会まで2時間を切る。正門前で開門の時間を待つ。アスファルトの照り返しが寝不足の身にこたえる。暑い一日になりそう。7時25分、開門、掲示物の補充開始。あと15分で学生たちも来る。メールを開いて、びっくり。前日の設営に参加できなかった学生に集合時間を伝えていなかった。7時50分。協賛団体の方々が見え始める。ホールを開けようとして、… 無い。鍵が無い。研究室に戻るが無い。研究室の電話が鳴る。役員の先生方ご到着。ホール前にご案内するが、相変わらず鍵が見つからず、守衛さんにかけてもらう。直後に鍵発見。いつもの自滅パターンになってきて嫌な予感。学内教員スタッフの宮崎先生や学内出席者の先生のご協力で手薄な発表会場の準備をケアしていただく。開会まであと10分。パワーポイント画面を操作する学生と最終打ち合わせ。思ったより集まりが良い。さあ、いよいよ始まり。

9時30分研究発表開始。開会前のサスペンスや若干の機器のトラブルはあったが、驚くほどに予定通りに進行している。「案ずるより産むが易し」と言ったところか。いや頼りない運営委員長を裏で支えている役員や学内の教員・学生スタッフ、拙いマネジメントに協力的な参加者の皆様のおかげといったほうが絶対に正確である。発表もその後の質疑応答も盛り上がっている。良かった。まずは発表者の皆様に感謝。

12時前、お弁当屋さんが休憩室(学生食堂)に到着。お弁当を立替ようとして…。どう考えても私の財布の中身では対応できないことに気づく。中村洋一先生に連絡、と言っても、借り物の携帯電話で、番号もわからず、走ってウイステリアホールに。そして休憩室にUターン。モウマンタイ(無問題)。いつものことだ。お弁当の仕分けを学生と終え、食事の誘導係とともに再びウイステリアホールへ。かなり集まっている。スラッシャー先生の特別報告を聴く皆様の表情は真剣そのもの。もう大丈夫。スラッシャー先生に感謝。

昼休みの委員会が終わり、弁当のごみを片付けて、午後の会場、ウイステリアホールに入場。「準備はOKですか」、とシンポジウムのパネリストの先生に尋ねて、パネリスト用のテーブルが出ていないことに気づく。あわててホール内の物置から前日に用意しておいたテーブルを出す。まったく油断大敵である。

シンポジウムが定刻に開始。ぎっしりと詰まったウイステリアホール。この時点で参加者が約80名。白熱する議論。タイミング良く、地元新聞社の記者が写真をパチパチ。雰囲気が良い。テーマが決まって半年間、頭に描いてきたイメージ、いやそれ以上である。パネリストの荘島宏二郎先生、杉本博昭先生、織田敦先生、名チーフの清水裕子先生、ありがとうございました。そしてフロアの皆様も。

質疑が盛り上がり、予定より5分シンポの終了が遅れるが、5分の休憩で、渡部良典先生の講演が始まる。ハードスケジュールの合間を縫ってのご登壇であったが、シンポの流れを汲んで、見事に本題に入っていく。大スクリーンに映し出された本邦初公開の「渡部良典少年」のテストペーパーに場内は騒然。完全に渡部ワールドに引き込まれる。後半は washback 研究の真髄に。お言葉に一段と熱がこもる。

総会、閉会行事とその後も順調に進行する。予定終了時刻よりも早く閉会。これは99%考えていなかった展開であった。中村洋一先生を初めとする皆様の的確かつ俊敏なサポートに支えられて、実に平穩無事な大会進行であった。大会最後の難関、懇親会ご参加の皆様への誘導も難なくクリアした(と思われる)。残るは、後片付けと懇親会。

後片付けを始めて、ペットボトルの放置が目立った。ゴミ箱のないキャンパスでご不便をおかけしたが、language testers たる皆様、ルールは守りましょうね。

片付けが終わり、学生スタッフと開会行事のパワーポイント画面をバックに念願の記念撮影。撮影に凝りすぎて、懇親会場への入場が大幅に遅れる。会場に入ったときの皆様の温かい拍手、この感激はいつまでも忘れられない。司会の李洙任先生、藤田智子先生、皆様方、心配かけてすみません。そして本日ご参加のすべての皆様、長く、熱き、楽しき一日をありがとうございました。

来年度はいよいよ10周年記念大会。この原稿を書く段階で、李洙任先生がご勤務される龍谷大学での開催の方向で計画が着々と進められている。記念大会の名に恥じぬ素晴らしい内容にしたい、皆様のご支援、ご指導のほど、よろしく願います。



特別報告

Two Conferences, Three Organizations

Randy Thrasher

(Continued from p. 1)

KELTA's first annual conference

The official title of the conference in Seoul was The 2nd KELTA/SNU FLERI International Conference. SNU FLERI is Seoul National University, Foreign Language Research Institute. Although this is the first year of KELTA's existence, this was the second international conference because such a conference held last year was organized by

SNU FLERI and the language testing research group from which KELTA grew.

The theme of the conference was Validity Issues in Foreign Language Assessment. The President of KELTA, Professor Oryang Kwon, and his Executive Board, were able to get Professor Lyle Bachman of UCLA to deliver the first Keynote Speech. Lyle spoke on Validity issues in web-based language assessment. Some of you have heard Lyle or his students speak on the UCLA WebLAS project which has produced web-based tests in English, Korean, and Japanese. After quickly reviewing the computer based testing and web-based language assessment literature since Canale 1986, Lyle introduced the WebLAS system and discussed the validity issues that arise when we change to a web-based format. He pointed out that there are three ways that the test characteristics are changed. The first is the way a test is delivered. Computer based testing allows multiple sources of input. A second way it changes is by allowing a wide variety of response formats. The third change comes with the possibility of machine scoring of production responses. In response to a question from the floor, Lyle agreed that, in addition to machine scoring of responses traditionally scored by hand, computer based testing raises the possibility of using response times and other data that the computer can track.

He claims that both the nature of the construct we are measuring and the domains to which score based inferences generalize may change with the change in the characteristics of the test. He concluded by pointing out some of the changes that were found when WebLAS tests of Korean, Japanese, and EFL were compared with pencil and paper (P & P) versions. For example, Sawaki (2002) reported that there were a greater variety of reported strategies used in the P & P mode, but I can't help wondering if this may have been the result of greater familiarity with the P & P mode than with the computer delivered mode.

Two of the three scheduled papers were presented. The one I would like to focus on in this report was the first—English Proficiency Requirements for Pilots and Air Traffic Controllers: Assessment of Speaking Skills. It dealt with the research of Dr. Oryang Kwon of Seoul National University and Dongil Shin of

Chung-Ang University. They were asked by the Korea Civil Aviation Safety Authority to do a preliminary study of what would be required to bring Korea into compliance with the plan of the International Civil Aviation Organization (ICAO) to assess the English proficiency of aviation personnel throughout the world. Instead of imposing one test on all aviation authorities around the world, ICAO has developed proficiency guidelines and minimum requirements but has left it to the various countries to develop tests that would measure proficiency at the levels that they have set down.

The presentation by Professors Kwon and Shin raises several important points for ESP testing. One is the nature of what they call 'plain English' (to distinguish it from the specialized language of what they call 'telephony communication'). They make an important point that the plain English used by pilots and air traffic controllers is not the same as that used in other situations. Air controller-pilot conversation deals solely with the movement of aircraft. Much of it is telephony communication with terminology and phrasing that would be difficult if not impossible for a non-specialist to understand. But they often use a mixture of plain English and telephony to confirm the instructions given in telephony. Kwon and Shin quote an example of this elaboration.

"I want you to turn left abeam the shopping mall at your one o'clock. Do you have it in sight?" (Mell 2004)

This example shows that, in addition to specialized language, there is a variety of everyday English used by this specific specialized field.

The other point that they raise that I would like to mention here are the qualifications of test designers, item writers, editors, and raters. The ICAO demand that raters be at level 6 (Expert) but do not require them to be native speakers of English. But Kwon and Shin mention that there would not be enough qualified persons among the Korean air controllers and pilots, so that it will be necessary to train English native speakers or Koreans with a high level of English proficiency but lacking experience in air traffic controllers and pilots' telephony communication. They point out that the same

need faces test designers, item writers, and test editors; and they recommend that experts in one field need to be educated in the other. This lack of expertise in the specific field needing a test is a problem that faces language testing experts so we need to be educated in that field. But Kwon and Shin point out that there is also a need to educate members of the target specific specialized community. That is, in this particular case, experts in air controller-pilot communication need to be taught the basic principles of language testing if they are going to be useful in helping to design, write, or edit the test.

I will mention my own presentation, not to blow my own horn, but because it provides something of a link between LTRC 2005 and the 2nd KELTA/SNU FLERI International Conference. When I was first asked to speak in Seoul I was told that Lyle would be speaking on validity issues in web-based language assessment and so I decided to discuss a paper which attacks the consensus view of validity, (The Concept of Validity, 2004, Borsboom, Mellenbergh and van Heerden, *Psychological Review* Vol. 111 No. 4). To my surprise, the Messick Memorial lecture at LTRC 2005 dealt with the same issue. Bruno Zumbo does not fully agree with Borsboom, Mellenbergh and van Heerden but he has reached a similar conclusion—the consensus view (that validity is a unitary concept, the all validity is construct validity, and that validity resides in the correctness of decisions based on test results) needs to be reexamined. In the Messick lecture Bruno claimed that since the idea of construct validity depends crucially on nomological networks, we must abandon it and, with it, the idea that validity is a unitary concept. Borsboom, Mellenbergh and van Heerden make the same point. However Bruno proposes that validity should be separated from issues of test utility, psychometric concerns (error of measurement, dimensionality, invariance, etc.), and the social consequences of the test (issues of justice and fairness). He believes that by looking at all four of these issues we can arrive at an overall judgment of the quality of the test.

In both Ottawa and Seoul, Lyle reacted strongly against this new view of validity calling it a step backward. However, his arguments against the new view (that the

problem with nomological networks has been known for a long time and that we know that individual test takers may approach the same test task in different ways) are not yet fully worked out or, to me, very convincing.

This is not the place to argue the pros and cons of either the consensus view or the new ideas put forward by Zumbo and Borsboom, Mellenbergh and van Heerden. But you should be aware that arguments are being marshaled against the consensus view and, as I concluded in Seoul, having the testing community take a fresh look at validity should be a useful exercise.

JLTA, KELTA, and ILTA

Let me conclude with some comments on the relationship between ILTA, KELTA, and JLTA. I was very happy to learn of the establishment of KELTA and flattered that Professor Kwon wanted the JLTA president to be present at their first annual meeting. I believe this is the fruit of the work of Kinoshita-sensei in establishing contacts in Korea and the JLTA Executive in encouraging cooperation with our colleagues in Korea by inviting Professor Kwon to speak at our Annual Meeting in Kumamoto. I believe we should build on this beginning and deepen the cooperation by exchanging publications with KELTA and perhaps sponsoring joint projects. One possibility that we will have to act on quickly is the possibility of working together to make a presentation at Melbourne next June that will help testers from other parts of the world better understand the testing situation in Asia. As you must have noticed, the conference theme speaks of an "Asia-Pacific perspective". A future possibility is to cooperate with Chinese testers. It has been tentatively decided that LTRC 2008 will be held in China and this might give us the opportunity to work together with KELTA and other testing organizations in Asia to present the testing scene here to those coming from other areas of the world.

JLTA already has a strong connection with ILTA. Not only did we organize LTRC 99, a number of our members are also members of ILTA and continue to present at LTRC and are being published in both *Language Testing* and *Language Assessment Quarterly*. However, since becoming the ILTA Secretary I have realized that ILTA, in spite of its solid

accomplishments, is not a strong organization. JLTA has slightly more members than ILTA and some weaknesses in ILTA's organization structure (for example, changing presidents every year) have kept it from doing as much as it might.

There are a number of regional testing organizations around the world. I know of three in the US, 1 in Israel, and 1 in Europe, and there may well be more. However, the ones that I am aware of are all organized around an annual meeting. They are not organized as JLTA is and do not have the number of services that JLTA can offer. These regional organizations do not publish a journal or newsletter, offer grants, carry out special projects, and usually do not hold research meetings between their annual meetings. But each one is trying to advance our understanding of language testing and hopefully raising the level of language testing expertise in their area. My hope is that we can all cooperate in ways that will move forward our common objectives.

日本語テスト学会(JLTA) 第22回研究例会のお知らせ

研究例会テーマ:

「大学英語教育における英語テストの役割」

場所: 慶應義塾大学 日吉キャンパス
来往舎大会議室

日時: 2005年 12月 10日(土) 13:20 ~ 17:00

受付: 12:50 ~

開会: 13:20

研究発表 13:20 ~ 14:50

司会: 中村優治(慶應義塾大学)

研究発表 1 13:20 ~ 13:50

葉田野不二美(東京学芸大学大学院)

「読解量と発表語彙力の関係」

研究発表 2 13:50 ~ 14:20

森本由子(筑波大学大学院)

「語彙テストにおける言い換え問題と空所
補充問題の比較」

研究発表 3 14:20 ~ 14:50

林 千代(国際基督教大学)

Sheppard, Chris(大東文化大学)

“L2 Vocabulary Knowledge and Authentic
Academic Text Comprehension”

(休憩 14:50 ~ 15:10)

シンポジウム 15:10 ~ 17:00

テーマ:「大学英語教育における英語テストの役割」

司会・提案 中村優治 (慶應義塾大学)

提案者: 秋山朝康 (文教大学)

堀口六壽 (東京国際大学)

内容: 研究例会テーマである「大学英語教育における英語テストの役割」を念頭におき、司会者を含めた上記3名の提案者がそれぞれの大学の状況を踏まえて、とくにプレイズメントテスト、英語カリキュラム、英語学力の3項目を取り混ぜながら、それぞれ 25 分程度発表し、その後参加者を交えての討論形式で進める。

懇親会 17:00 ~18:00(予定)

=====

参加費: JLTA 会員無料、一般: 1000円

問合せ: 慶応義塾大学文学部 中村優治

e-mail: nkyj@flet.keio.ac.jp

キャンパスへのアクセス:

http://www.keio.ac.jp/access/ac_hiyoshi.html

交通: 東急東横線 日吉駅 駅前(目安として急行にて渋谷より 18 分、横浜より 14 分。特急は停まりません。)

道順: 改札(一カ所のみ)を出て右のバス通りを渡ると日吉キャンパス。

並木道を半ばまで進み、郵便ポストのところで左折すると右側に来往舎があります。大会議室は2階にあります。

事務局よりお知らせ

- ◆ 転勤、転居等、JLTA の名簿記載事項に変更が必要な場合は、速やかに、事務局までご連絡下さい。また、銀行引き落としによる会費納入を利用している会員で、吸収・合併などにより、銀行名、支店名、口座番号等が変更になった場合は、必ず事務局まで、その旨をお知らせ下さい。
- ◆ JLTAの活動に対するご意見やご要望、Newsletter等への掲載希望記事などがありましたら、事務局までご連絡ください
- ◆ The JLTA office would be grateful if you could update us on your recent achievements relevant to the field of language testing and evaluation. Any information on your presentations, publications, awards, and so forth would be greatly appreciated. The relevance of the information will be evaluated by the office and given in the newsletter in due course.
- ◆ 会員の皆様の当該分野での近況をお伝えください。テスト・評価関係本を出版した、論文を発表した、賞を受けた、博士論文を提出した、など。随時報告していきたいと考えております。



編集後記

静岡産業大学での大会の日。学生さんたちが、一生懸命に汗を流して学会のお手伝いをしてくださっている様子を目にされた参加者も多いことと思います。大会実行委員長の法月先生を中心にしたコミュニティの力とあたたかさのようなものを感じる一日でした。実は、これは私がJLTAに対して抱いているイメージでもあります。今回のニュースレターの作成にあたって、多くの方々のご協力を得ることができましたが、送信されてくる原稿やコメントのひとつひとつを開けながら、送信者の笑顔が浮かんで参りました。JLTAの輪が、今後、ますます広がっていても、コミュニティのあたたかさが感じられる学会であることを願っております。(ゆ)

日本言語テスト学会事務局
〒389-0813 長野県埴科郡戸倉町芝原 758
TEL 026-275-1964 FAX 026-275-1970
e-mail: youichi@avis.ne.jp
URL: <http://www.avis.ne.jp/~youichi/JLTA>



— 会員名簿についてご意見を伺います —

2005年度の総会において、会員名簿について以下のような検討がなされました。

- ・個人情報保護法の施行に伴い、自宅の住所や電話番号、メールアドレスなどの「個人情報」も掲載されている会員名簿の発行については、慎重に対応する必要が生じてきた。
- ・現在は2002年度の会員名簿を発行したままの状態であるが、上記の件もあり、今年度は発行を控え、会員各位から意見を募り方向性を検討していく。

そこで、今回、会員の皆様に、会員名簿に関するご意見を伺いたいと思います。以下の項目について、ご回答をお願い致します。

以下にご記入頂き、ファクスにて事務局 026-275-1970 宛、送信をお願い致します。あるいは、コピーの郵送 (〒389-0813 長野県千曲市若宮 758 日本言語テスト学会事務局)、メールによる送信 (youichi@avis.ne.jp) でも結構です。〆切は2005年11月30日(水)でお願い致します。ご回答がない場合には、運営委員にご一任されたと判断させていただきます。

調査結果を運営委員会で検討し、方向性を決定させていただきたいと考えております。

現在の名簿は以下のような情報を掲載しています。

会員名簿の発行について、以下の4つのいずれかひとつの にチェックでお答え下さい

- 会員名簿は不要、発行しなくてもよい
- 現在と同様の項目のまま会員名簿を発行する

* 以下のご意見の場合は、掲載可能あるいは掲載すべき項目の欄に、各自の最新情報をご記入下さい。

- 現在と同様の項目のままでよいが、各自の希望する項目のみを掲載する
- 全員分の掲載項目を整理して発行

氏名 (アルファベット順) e-mail アドレス (自宅) (職場)	郵便番号 都道府県名 住所	自宅 TEL FAX	所属先	所属先 TEL FAX	専 門
中村 洋一 youichi@avis.ne.jp youichi@okiwa.ac.jp	〒 389-0813 長野県 千曲市若宮 758	026-275-1964 026-275-1970	常盤大学	029-232-2790 029-232-2790	言語テスト

氏名 (アルファベット順) e-mail アドレス (自宅) (職場)	
郵便番号 都道府県名 住所	
自宅 TEL FAX	
所属先	
所属先 TEL FAX	
専 門	

* その他、ご意見がありましたら、以下にご記入下さい。